

政策検討ワークショップに向けた市民ペルソナの生成 — 研究生活を振り返って —

酒井 和 (さかい なごみ)
早稲田大学大学院

1. はじめに

この度は、2025年全国研究発表大会において、学生優秀発表賞をいただき、大変光栄に思います。

本研究は、多くの方々の支えと助言のもとで進めることができました。発表当日にいただいた貴重なご質問やご意見も含め、本研究に関わってくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

2. 研究概要

本研究では、自治体における政策検討のワークショップにおいて、参加者の議論することを支援するための、市民ペルソナ生成の方法について検討しました。私は、Societal Prototyping Design (SPD) 技術開発プロジェクト [1] の一環として、実際の市の政策検討やワークショップの文脈に接しながら研究に取り組ませていただきました。

近年、エージェントベース社会シミュレーション (ABSS) などの手法を用いて、施策の影響を事前に検討する取り組みが進められています。一方で、シミュレーション結果だけでは、市民や関係者がその内容を自分事として捉え、主体的に議論することが難しい場面もあります。そこで本研究では、ワークショップ参加者が ABSS の内容を理解し、自分事として解釈するための手がかりとして用いられる市民ペルソナに着目しました。

具体的には、実在する市民データをもとに抽象化された市民像を出発点とし、ワークショップでの議論において行動や人物像を想像しやすいペルソナへと、どのように変換していくべきかを検討しました。その際、ペルソナを特定の作り手の判断や経験に依存して完成させるのではなく、実際に政策検討やワークショップに関わるステークホルダーを巻き込み、対話や評価を通じて形づくっていく方法を重視

しています。

本研究は、SPD 技術開発プロジェクトの中で、実際の自治体を対象に適用され、生成されたペルソナは政策検討ワークショップで使われました。ワークショップにおいては、ペルソナが参加者にとって市民の特性を理解するための手掛かりとなり、参加者が市民の立場を意識しながら議論を行うための一助となったと考えています。

3. 研究生活を振り返って

受賞の知らせを聞いたときは、正直とても驚きました。研究を始めた当初は、自分がこのような成果を出せるとは思っていなかったからです。

私が修士進学を意識するようになったのは、中学生の頃から、母の仕事の関係で工学部の修士や博士の学生と接する機会があったことがきっかけでした。学生生活を楽しむ様子と、同時に真剣に研究に向き合う姿を見ているうちに、「修士に進む」という選択肢が、次第に当たり前のものとして意識されるようになりました。

研究室に配属されてからは、先輩や同期の姿に多くの刺激を受けました。周囲には、研究テーマに直接関係しないことでも関心を広げ、自ら進んで学び続けている学生がいて、その熱量の高さに驚かされることがありました。そうした姿を目にする中で、自分は研究に対して彼らと同じ距離感で向き合っているのだろうか、立ち止まって考えるようになりました。自分は同じように強い知的好奇心を原動力に研究を進めるタイプではないのかもしれないと考えようになり、研究との向き合い方に迷いを感じたこともありました。

それでも、苦しい局面を乗り越えながら研究を続けることができたのは、私の研究に期待し、見守ってくださる方々がいたからだと思います。それが私

にとっての大きな原動力でした。

普段は、新聞を毎日読むといった個人的な目標すらなかなか続かない性格ですが、自分の研究成果がプロジェクト、ひいては市の取組みに影響するかもしれないと考え、自然と気持ちが引き締まりました。研究が社会とつながっていることを実感できた経験は、研究に向き合う姿勢を大きく変えるものでした。

研究室選びに悩んでいた学部3年次に、「街をテーマに研究したい」という私の関心に寄り添い、お忙しい中で研究プロジェクトを紹介してくださった高橋教授のおかげで、この研究テーマに出会うことができました。このテーマに巡り合えたことは、私にとって非常に幸運だったと感じています。その後も、研究指導にとどまらず、さまざまな場で研究者の方々と接する機会を設けていただき、研究に向き合う姿勢や視野を広げるうえで大きな支えとなりました。

研究室内の坂田先生やSSAチームのメンバーにも感謝しております。研究が行き詰まったときにはアドバイスをもらい、しんどいときには「大変だね～」と笑いながら、前向きに研究を続けることができました。研究の大変さも含めて共有できた時間は、今振り返るととても心強いものでした。

また、プロジェクトの中で、未熟な研究アイデアに対しても丁寧に助言をくださった先生方や、他研究室の学生の皆さまからも多くの刺激を受けました。プロジェクトに温かく迎え入れていただいたこ

とで、安心して議論を重ね、自分なりに研究を進めることができました。異なる関心やアプローチに触れることは、自分の研究を見直す大きなきっかけとなりました。

さらに、研究にご協力くださった市役所の皆さま、市民の皆さま、そして私ならできると応援してくれた家族や、苦しいときに励ましてくれた友人たちにも、この場を借りて感謝の気持ちを伝えたいと思います。

4月よりは、社会人として働き始めますが、研究活動を通して学んだ、課題設定の力や諦めずにアプローチする姿勢、そして、研究を通じて得られた多くの出会いを大切にしながら、今後の社会人生活も邁進してまいります。

参考文献

- [1] 貝原俊也「社会シミュレーションによる政策立案への接近～未来社会の共創的デザイン手法SPD (Societal Prototyping Design)」『計測と制御』第62巻、第1号、2023年、27-32ページ。

略歴

酒井 和 (さかい なごみ)

2020年3月に学習院女子高等科を卒業し、同年4月に早稲田大学創造理工学部経営システム工学科に入学。2024年4月に早稲田大学大学院創造理工学研究科経営システム工学専攻に入学。現在、高橋研究室修士2年生。